

今を 読み解く

編集委員
関口 和一

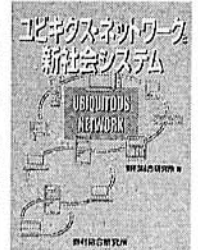
インターネットや携帯情報サービスの広がりを受け、最近よく耳にするのが「ユビキタス」という言葉だ。ユビキタスコンピュータリング、ユビキタス情報社会……。「遍在」とか「どこでも」と注書きされるが、いったいどんな世界がやって来るのか。そんな疑問に答えようという書物が相次いでいる。

「ユビキタス」の正体を最もわかりやすく解説したのが坂村健東京大学教授の『ユビキタス・コンピュータ革命―次世代社会の世界標準』(角川書店、二〇〇二年)だ。坂村氏は一九八〇年代半ばに国産の基本ソフト「TRON(トロン)」を提唱して注目されたが、そこで目指したのがまさにユビキタスコンピュータリングだったという。

● 空気のように

ユビキタスとはもともラテン語で「神はどこにも遍在する」という意味だが、転じて「どこでもコンピュータを使える」という言葉になった。発祥は米西海岸のゼロックスのパロアルト研究所だ。八〇年代の急速なパソコンの普及から、「コンピュータは今後さらに我々の生活に行き渡る」と考え、そう呼び始めた。ラテン語の宗教用語を使ったのはそれらしく聞こえるためだ。

では実際どんな世界なのだろうか。坂村氏は「家電製品や生活用品などに小さなコン



情報端末(PDA)などによるモバイルコンピュータリングが広がりつつある。いつでもどこでも情報を入手できるという意味では、ユビキタス情報社会がまさに現実のものになったといえる。

● 有利な家電技術

そつた新しい情報社会の構図を描いたのが野村総合研究所の『ユビキタス・ネットワークと新社会システム』(野村総合研究所、二〇〇二年)である。「ユビキタス・ネットワーク」は同研究所が三年

今後のネット端末はパソコンよりもPDAなどの新しいデジタル家電に移っていくと予測、「ユビキタス情報社会は家電技術に強い日本が再び競争力を発揮できる大きな好機だ」と強調する。

その取り組みも始まった。「e-Japan戦略」で掲げた次世代インターネット「IPv6」の開発である。「ユビキタス情報社会ではたんにIPアドレスが必要になるが、現行システムでは枯渇する恐れがあり、番地表示のケタ数を増やすことにし

情報入手至る所で

前に命名した。「どこでも情報を手でできるのはコンピュータの端末よりネットワークのおかげだから」(村上輝康理事長という理由だ。

ネットワークが社会に浸透

すればビジネスのやり方も当然変わる。特に情報の伝達を人間や紙に頼ってきた日本企業には大きな変革が必要だ。そのための企業戦略を説いたのが経営コンサルタントの荒木久義氏、牧田幸裕氏による『ユビキタス革命―日本企業再生の力』(日経BP企画、二〇〇二年)である。

実は同様な情報社会を表す言葉には米IBMが提唱する「パーベイシブ(浸透する)コンピュータリング」という表現がある。あえて違いを探せば、ユビキタスが情報の利用者側に立った概念なのに対し、パーベイシブは提供者側に力点があるといえる。

だが表現は何にせよ、最も重要なのはセキュリティの問題だ。便利になるといふことは一方で情報の漏えいやプライバシーの侵害なども起きやすい。住民基本台帳ネットワークの是非が論議されたが、手放しでは喜べないのもユビキタス情報社会の特徴なのである。

ユビキタス社会 到来

報を空気に例えれば、人間が三分間は呼吸を我慢できるように、移動中も三分すれば必ずどこかのネットにつながれる環境だと説明する。最近ではプロードバンド(高速大容量)の常時接続や携帯



携帯型の情報機器の開発が一段と進みそうだとイラスト・よしおか じゅんいち